

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ⑬

明治時代の愛媛の焼き物に「三間焼(みまやき)」がある。かつて宇和島市三間町土居中(どいなか)で、

日常食器が生産され、宇和島市内の陶器商に卸売りされ、近隣や南予方面に販売されたこと始まる。窯業の先進地である砥部焼や御荘焼

の陶工などによる技術指導のもとで、1890(明治23)年ごろに開窯した。窯場の焼失などにより、操業は約10年と短く、南予地方の幻の焼き物といえる。

今回紹介するのは希少な三間焼の製品「染付(そめつけ)草花文鉢」である。

大・中・小サイズの三ツ組鉢で、酸化コバルトを用いて鉢の見込みに草花文様、外面に東屋山水文様が手描きされている。鉢の底部には「三間造」の産地銘が記されている。見込みには使用痕がかなり見られ、日常食器として長年使用されたものとみられる。

操業は10年幻の焼き物

明治時代の「三間焼」



三間焼染付草花文鉢。口縁径22.5センチ、高さ7.2センチ。底部に「三間造」の銘がある。県歴史文化博物館蔵

三間焼は、中予の砥部焼、南予の御荘焼という磁器の大生産地の間にあって、規模ながらも先進地の技術を積極的に導入している。紹介した鉢は明治中期の南予地方の産業や地方窯の歴史をもの語る資料として注目される。

(専門学芸員・今村賢司)

〈随時掲載します〉